



基調講演 これからの時代に求められる国語力と読書指導

高木まさき (横浜国立大学・「ことばと学びをひらく会」会長)

これからの「読書指導」は、ただ同じ作者・筆者の本を読ませたり、学校図書館に子どもを連れて行って自由にさせたりするだけでは成り立ちません。読書の目的、読書材の範囲、読書行為のプロセス、読み方の種類等を分析し、学習者自身に「読書生活をデザインする」力を身に付けさせることが大事です。ここではその基本となる観点を整理して提案していきます。

「ことばと学びをひらく会」発足のごあいさつ

みなさん、おはようございます。突然、台風まで発生してしまいましたが、そのような中を多くの皆様にご参加いただきまして本当にありがとうございます。

これから基調講演をさせていただきますが、その前に、今日は、第1回の大会でございますので、会の発足にあたりましてごあいさつをさせていただきます。

教育現場、あるいは教育界は、世代交代や学力問題などさまざまな問題を抱えております。「ことばと学びをひらく会」は、そういう激しい動きのなかで先生方と学び合う場の必要を思い、今年6月に発足いたしました。「ことば」と「学び」を切り口として考えを深め、また「ことば」と「学び」を他者に向かって、そして未来に向かって「ひらく」ことができる学び手を育てたいということ



で始まった会でございます。今後ともご支援のほどよろしく願い申し上げます。

では、基調講演を始めさせていただきます。

最近の動向から

言語環境・メディア環境が激変する中、「PISA調査」、「文化審議会(以下、文化審)答申」、「中央教育審議会(以下、中教審)経過報告」、「全国学力・学習状況調査」など、種々の調査が行われておりますが、その中で最も注目すべき課題とされているのが「読むこと」の教育です。読解力について取り上げられることが多いのですが、このことと読書は切り離せません。しかも、読書指導は、次の学習指導要領の重要な柱になってくるだろうと思えます。

以前から指摘されてきた子どもの読書離れが、喫緊の課題となったのは、「学校読書調査」・「PISA2000」調査のころでした。世界と比べて日本の子どもたちが本を読まないということが明らかになったわけで、状況は深刻に受け止められました。その後、

朝読書などで回復はしてきているようですが、文化審答申「これからの時代に求められる国語力について」という報告書も出され、読書が不可欠であることが強調されたのです。



PISA調査に出てくる「reading literacy」は、「読解力」と訳されていますが、英米では、「読解」と「読書」を区別しません。つまり、読解力の問題というのは、そのまま読書の問題でもあるということにとらえる必要があるということです。文化審ではより教養主義的な学力が強調され、PISA調査ではより実用的な学力が要求されたかと思えます。これからの国語力をどう考えていくかというとき、この二つの大きな流れがあることを視野に入れておく必要があると思えます。

2004年に出た「これからの時代に求められる国語力について」は、かなり大きな反響をよびました。報告書では、これからの時代における都市化、国際化、少子高齢化、情報機器の増加、また日本社会の人心の荒廃といったことが盛んに指摘され、「コミュニケーション力」と「情緒力」とが非常に重要であると強調されたのです。そして、これらの力を育てるためには、自ら本に手を伸ばす子どもを育てることが重要であると強調されています。つまり、読書指導の重要性が改めて強調されたわけです。また、報告書では、これまでの方向とは違うことですが、名作とか古典、朗読・暗唱というものも強調されております。これを見ると、読書指導がこれからの大きな流れ、改革の重要な柱の一つになってきているととらえることができます。

読書行為を見直す

読書というものを見直す観点として、私見ですが、次のようなことを掲げております。まず四つほど述べさせていただきます。

①読書の目的

従来は、娯楽読書とか情報読書とか二分されることもありまし

た。しかし例えば、元気になりたいときに文学作品を読む人もいるでしょうが、「鉄ちゃん」、「鉄子さん」とよばれる鉄道ファンにとっては、時刻表を読むことがエネルギー源になるのです。そうやってきますと、娯楽読書といってもいろいろな対象があり、同じ書物でも読まれる目的はいろいろありうる——そういう柔軟性も必要になってくるでしょう。

②読書材の範囲・種類

先ほど、「reading literacy」のお話をしましたが、読書材というものも、単に本だけではなくて、例えば、新聞や広告、あるいはホームページや映像なども、これからは新しい読書材、教材の一つとして考えていく必要があります。

③読書行為のプロセス

読書行為といっておりますが、これはどうやって本を読んでいるかということです。そもそもいろいろな活動があるなかで、ただ娯楽というのなら、映画でもテレビでもいいわけです。その中で、読書という行為を選ぶのはどうしてなのか、というところから考えていく必要もあるだろうと思います。すなわち、読みの過程においてどのようなことが起こっているのか、何が必要なのかをもっと丁寧に考えていくべきだと思います。

④読み方の種類

読み方の種類にもいろいろあります。学校でやっているのはだいたい精読ですが、それだけではなくて、速読とか、斜め読みとか、比べ読みとか、いろいろな読み方があるのですが、それらは十分な指導がされてきたのでしょうか。おそらく次の学習指導要領では、用語としては分かりませんが、そういうことが出てくる可能性もあると思います。

指導方法を見直す

ただ子どもに本を渡して、「本を読みなさい」として試してみてもだめだということは過去の歴史で分かってきましたので、そうではない新しい角度からの読書指導のあり方を考えていく必要があるだろうと思います。

①読書指導の段階性・位置づけ

一つは段階性とか位置づけ、要するに、読む前・読んでいる間・読んだ後でどんな指導をするのか、どう位置づけていくのか、ということです。発達段階や学年に応じて、どのようなことを指導していくのかという観点でもう一度見直すことが必要でしょう。

②読書を広げるための視点

読書を広げるというと、従来は、同じ作家の作品や、同じシリーズの作品を読みましょう、というのが代表的な指導だったかと



思います。ただ、例えば「大造じいさんとガン」を15時間やって、では椋鳩十の作品をもう少し読みましょう、と言われてたら、私が子どもなら拒否したいのですが、いかがでしょう。

けれど、例えば、椋鳩十という人は、ガンを、鳥をこういふふうに見ている、あるいは、人間以上に英雄っぽいらえ方をしている。ではこの作家は、ほかの動物はどう見ているのだろうかと思ってしまうと投げかけると、読み広げる文脈ができると思うのですが、どうでしょう。同じ作家だからというだけではなくて、ほかの動物をどう見ているかという文脈ができるのです。

そして、「なめとこ山の熊」なども比べてみる。宮沢賢治という作家も童話でたくさん動物を取り上げているけれども、どんなふうにも動物を描いているか。全然世界が違います。こういう言い方が適切かどうか分かりませんが、賢治の方は、人間も動物も同じ生き物だと見ているけれども、椋鳩十は人間が上で、動物にも人間っぽいところがありますというふうに見ている。そういうふうにも文脈を作っていくと、読書を広げていくいろいろな視点が見えてくる。そう考えると、まだまだ手が付けられていない視点があるのではないかと思います。物語の構造だとか、人物の類型だとか、いろいろなことを比べていくことができる。そういうものをもっと開発していく必要があると思っています。

③読書活動の種類

読書活動の種類ですが、読書のアニメーションとか、ブックトークとか、本の帯やポップ作りなど、最近はいろいろなことが考えられていますので、それらを参考にしながら、学習者の状況にあった活動を組んでいくことが必要かと思っています。

本日は、以上に述べました観点を私なりに踏まえて、講演の先生とワークショップの講師の先生をお願いしております。この後、北川先生の記念講演がありますが、ご存知のように先生はフィンランドの国語の教科書を訳していらっしゃいます。この3・4年生の教科書の初めのほうは、読書単元といってもよく、本を読んでこない授業が成り立たないような、そういう作りになっている本です。そのようなお話もいろいろとうかがえることを楽しみにしております。

近年の動向の底に潜む危機

では、どうして、ここまで読書ということを指導して、あるいは子どもたちに読書というものをもう一度取り戻していかなければいけないのか、ということを考えていきたいと思っています。

それは一つには、文化審答申にもありましたが、「情報の断片」ということが関係しています。つまり、最近の風潮で申します



と、勝ち組になるため、自分だけ得すればいいとか、生き残ればいいといった考え方が広がりつつあるように

思います。象徴的だと思いましたが、ホリエモンが本も新聞も要らない、ネットがあればいいということを言いましたが、得するためだけの情報はネットだけでも得られるわけです。それは結局、現実を後追いすることにしかない「現実追従型」というような思考だけを産み出すと思います。

現実に合わせて自分だけが生き残っていくという情報。でも、本来情報というのは、より大きな知識構造の中に組み込まれたものですので、たまたま得する情報に出会えたように見えるかもしれませんが、それはもっと大きな構造で見たときには、失敗の原因になっているということもあるかもしれません。そういうことばかりをしていくというのは、やはり非常に危険であるということです。その意味でもホリエモンは象徴的なのかもしれません。

「読書生活」をデザインする力

そこで、これから大きなことを申しますが、あるべき社会を構築していくために、やはり「価値創造型」の思考ができるような、そういう子どもたち、あるいは私自身も含めてですが、人間を育てていかなければいけないということです。本や情報を、比較し、批判し、関係付けていく力。そして、本一冊を最後まで読み通して、粘り強く思考する力。そういう力によって価値を創造していく、そういうことが求められていると思います。

まとめますと、情報化社会にあって現実に即した「読書生活」と同時に、それだけに流されない、自分のあるべき「読書生活」というものを自ら作れる。つまり、「読書生活」をデザインする力、子どもたちにそういう力をつけることを意識した読書指導が大事になってくるのだらうと思います。単に本を読ませればいいのかということだけではなく、新聞などいろいろな読書材を組み合わせながら、読書指導を再構築していく必要があるのではないのでしょうか。

読書の楽しみ

最後に、読書についての私の個人的な思いをお話したいと思います。私は、子ども時代にはあまり本を読む人間ではございませんでした。海が近かったので、暇さえあれば釣りばかりしていました。中学校以降、少しずつ本を読むようになりますと、いろいろなことを感じるようになりました。それを3点に整理してみました。

一つは、読書することによって、「世界や物事の構造が見えてくる」ということが分かったのです。例えば、構造主義という考

え方で、その関係の思想書とか文化人類学の書物を読む。すると世の中には構造というものがあるのかということがだんだん分かってくる。それ自体は非常に楽しいですね。ところが、「共同幻想論」などという本に出会うことで、それも幻想だったのかとがっかりするのです。そういうことも含めて楽しいわけです。

その次に、「人・生活・風景に奥行きが出てくる」ということ。「おくのほそ道」の話ですが、修学旅行などで平泉に行かれる中学生もいるでしょう。何もないというと怒られるかもしれませんが、あそこには何もない。秀衡の「跡」であり、田野と川があるだけです。でも、芭蕉はそこで涙します。なぜでしょう。義経の過去を思い、藤原三代のことを思い、そして杜甫の「春望」を思う。何もない風景の自然の中に、いろいろな物語を重ねることで彼は涙することができたのです。そして、そのことを知っている私たちもその地で感興を催すことができるというわけです。

つまり、私たちは素で物を見ているのではないのです。そこにいろいろな物語を重ねることで風景や事物に奥行きが見え、人の奥行きが見えてくる。これは、国木田独歩の風景の発見、雑木林の発見というあたりから始まったことですが、それまで美を見出さなかった自然に美を見出していく。そういう経験を重ねているからこそ、いろいろなものが楽しく美しく見えるということなのです。

そして、「ぜいたくな時が流れていく」。今、私が申し上げたことは、分かってもなんの利益にもならないわけです。けれども、夜寝る前にふとんの中で、10分早く寝た方がいいのに、その10分を余分に使って本を読む。これは非常にぜいたくなことであり、非常に心地いいことです。

そう考えますと、読書というのは、時と空間を私の方に引き寄せ、私の中で作り替える。そして、ときどきその世界に立ち止まることができる。そういうぜいたくな時間、行為なのではないでしょうか。

先生方も、中学生などもなかなか本を読む時間もないというのが現実だろうと思います。だとしたら、そういう忙しい現実そのものを変えていくべきではないか。本を読む時間すらないような生活を見直していくべきではないか。

読書指導を考えると、そういうことまでを含めて考えることではないかと私は思っております。

ご清聴ありがとうございました。

読書のたのしみ

- 世界・物事の構造が見えてくる
- 人・生活・風景に奥行きが出てくる
- ぜいたくな時が流れていく

読書は、時と空間を、
引き寄せ、作り替え、立ち止まる。